国語

注意

1 問題は **1** から **5** までで、12ページにわたって印刷してあります。

2 検査時間は**五〇分**で、終わりは**午前九時五〇分**です。

3 声を出して読んではいけません。

4 答えは全て解答用紙に**ＨＢ又はＢの鉛筆**（**シャープペンシルも可**）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**

5 答えは**特別の指示**のあるもののほかは、各問の**ア・イ・ウ・エ**のうちから、最も適切なものをそれぞれ**一つずつ**選んで、**その記号の ◯ の中を正確に塗りつぶしなさい。**

6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。

7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。

8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、**その数字の ◯ の中を正確に塗りつぶしなさい。**

9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

(1) 寒い冬の夜空に星が輝く。
(2) 共通の友人を介して知り合う。
(3) 傾斜が急な山道をゆっくり上る。
(4) 紅葉で赤く染まる山並を写真に撮る。
(5) 真夏の乾いたアスファルトが急な雨でぬれる。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 私の住む町は起伏にトんだ道が多い。
(2) 山頂のさわやかな空気を胸いっぱいにスう。
(3) コンサート会場でピアノのドクソウを聴く。
(4) バスのシャソウから見える景色が流れていく。
(5) 毎日欠かさず掃除をし、部屋をセイケツに保つ。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

高校生の美緒は、母親との言い争いをきっかけに、父方の祖父が営む岩手の染織工房で生活し始め織物制作を学んでいる。八月上旬、父親の広志から電話があり、母親と共に岩手に行くのでひとまず一緒に東京に帰らないかと言われた。同じ頃、ショール作りの練習として作り始めたカーテンの色を決めかねていた美緒は、祖父から「コレクションルーム」で気に入った色を探すように言われた。

「おどる12人のおひめさま」と書かれた背表紙を見つけ、美緒は本を手に取る。

「これ、この絵本。これはまったく同じのを持ってた。」

ページをめくると、森の風景が目の前に広がった。

十二人の姫君が楽しそうに銀の森、金の森、ダイヤモンドの森を進んでいく。

「でも、あれ？　なんか印象が違う……。すごくきれい。昔、読んだときは絵が怖くて、全然好きじゃなかったんだけど。」

祖父が隣の本棚の前に歩いていった。

「エロール・ル・カインが絵をつけたその話はグリム童話。ドイツ人の編纂だ。この話と似た伝承をイギリス人が編纂したものがある。そちらはカイ・ニールセンという画家が挿絵を描いているんだが。」

祖父が本を手に取り、戻ってきた。こちらのタイトルは漢字で「十二人の踊る姫君」とある。

あっ、と再び声が出た。

「それも持ってたよ。お誕生日のプレゼントにもらったの。」

ほお、と祖父が感心したような声を上げた。
「これはなかなか手に入りづらい本だ。ずいぶん探したんだろうな。」
それを聞いて、うしろめたくなった。
この本は四つの話を集めた童話集だ。長い間本棚に置いていたが、中学生になるとき、中学入試の問題集と一緒に処分しようとしたところを祖母が見つけ、横浜の家に持ち帰っていった。
この本にもやはり森を抜けていく十二人の姫君の絵があった。繊細な線で描かれた絵がとても神秘的だ。
「こんなきれいな本だったっけ、これも。」
「日本の絵本もいいぞ。実はこれはホームスパンではないかと、私がひそかに思っている話がある。」
祖父がもう一冊、絵本を差し出した。
宮沢賢治・作、黒井健・絵「水仙月の四日」とある。
本の扉を開けると、雪をかぶった山の風景に目を奪われた。この数ヶ月ですっかり見覚えた山の形だ。
「これ、もしかして、岩手山？」
「宮沢賢治は花巻と盛岡で生きたお人だからな。」
さらにページをめくると、赤い毛布を頭からかぶった子どもが一人、雪原を行く姿が描かれていた。
「この子がかぶっているの、私のショールみたい。」
そうだろう？　と答え、祖父は慈しむように文章を指でなぞった。
「ここに『赤い毛布』と書かれているが、私はこの子は赤いホームスパンをかぶっていたのだと思う。雪童子の心をとらえ、子どもの命を守り抜いた赤い布は、田舎者の代名詞の赤毛布より、この子の母親が家で紡いで作った毛織物だと思ったほうがロマンがあるじゃないか。話のついでだ。私の自慢もしていいだろうか。」
「うん、聞かせて！」
祖父の手がのび、軽く頭に触れた。すぐに手は離れ、祖父はさらに奥の本棚へと歩いていった。一瞬だが、頭をなでられたことに気付き、きまりが悪いような、嬉しいような思いで、祖父の背中を追う。
(1)「ねえ、おじいちゃん。あの棚の本、あとで私の部屋に持っていっていい？」
「一声かけてくれれば、なんでも持っていっていいぞ。」
一番奥の棚の前で祖父が足を止めた。そこには分厚く横にふくらんだノートが詰まっている。
祖父が一冊を手に取った。左のページには折り畳まれた絵が一枚貼ってある。さきほど見た絵本「水仙月の四日」の一ページだ。
右のページにはその絵に使われている色と、まったく同じ色に染められた糸の見本が貼ってあった。次のページには、たくさんの化学記号と数値が書き込まれている。
「これって、絵に使われた色を全部、糸に染めてあるの？」
「そうだよ。カイ・ニールセンやル・カインの絵本の糸もある。」
祖父が別のノートを広げると、さきほど見た「十二人の踊る姫君」の絵が左ページに貼られていた。「ダイヤモンドの森」の場面だ。
このノートも、「水仙月の四日」と同じく、絵に使われている色と同色の糸が右に貼られている。
「この糸で布を織ったら、絵が再現できるね。」
「織りで絵を表現するのは難しいが、刺繍という手もあるな。」

「この糸で何つくったの？　見せて！」
「何もつくっていない。狙った色がきちんと染められるかデータを取っていたんだ。ここにあるノートは私の父の代からの染めの記録だ。数値通りにすれば、完璧に染められるというわけでもないが、道しるべみたいなものだな。」
　下の棚にある古びたノートを取り出すと、紙は淡い茶色に変わっていた。鉛筆でびっしりと書かれている角張った文字は、祖父とは違う筆跡だ。
「もしかして、これが、ひいおじいちゃんの字？」
　祖父がうなずき、中段の棚から一冊を出した。
「このあたりの番号のノートから私も染めに参加している。この時期は父の助手だったが。」
(2) ノートをのぞくと角張った字と、流れるような書体の祖父の筆跡が混じっていた。
　曾祖父の存在を強く感じ、美緒はノートの字に触れてみる。
　顔も姿も想像できないが、何十年も前に、このノートに曾祖父が文字を書いたのだ。
「お父さんがこの前言ってた……。ひいおじいちゃんの口癖は『丁寧な仕事』と『暮らしに役立つモノづくり』だって。」
「古い話を広志もよく覚えていたな。」
　祖父が微笑み、羽箒で棚のほこりをはらった。
「おじいちゃんは、お父さんが仕事を継がなくてがっかりした？」
「がっかりはしなかった。」
(3) 即答したが、そのあとの言葉に祖父は詰まった。
　しばらく黙ったのち、小さな声がした。
「ただ……寂しくはあったな。それでも、娘に美緒と名付けたと聞いたとき、広志が家業のことを深く思っていたのがわかった。だから、それでいいと思ったよ。」
「えっ？　そんな話は聞いたことない。私の名前に何か意味があるの？」
　祖父が、曾祖父がつけていたノートに目を落とした。
「美という漢字は、羊と大きいという字を合わせて作られた文字だ。緒とは糸、そして命という意味がある。美緒とはすなわち美しい糸、美しい命という意味だ。」
　美しい糸、と祖父がつぶやいた。
「美緒という名前のなかには、大きな羊と糸。私たちの仕事が入っている。家業は続かなくとも、美しい命の糸は続いていくんだ。」
(4) 目の前にある大量のノートを美緒は見つめる。
　曾祖父と祖父が集めてきたデータの蓄積。このノートを使いこなせれば、自分が思った色に羊毛や糸を染めることができる。
　その技を持っているのは、さっき頭に触れた祖父の手だけだ。
「おじいちゃん……私、染めも自分でやってみたい。」
　祖父がノートを棚に戻した。
「染めは大人の仕事だ。熱いし、危ない。力仕事だから腰も痛める。染めの工程はこの間のコチニール*染めでわかっただろう？　それで十分だ。」
「熱いの大丈夫だよ。危ないことも気を付ける。」
「気を付けているときには事故はおきない。それがふっと途切れたとき

に間違いがおきるんだ。そのとき即座に対応できる決断力がほしい。私は年寄りだから、その力が鈍っているよ。美緒も決して得意なほうではないだろう。」

「でも……。」

「ショールの色は決まったか？　自分の好きな色、これからを託(たく)す色は見つけられたか？」

「まだ、です。探してるけど。」

ショールの色だけではなく、部屋のカーテンの色もまだ決められない。

口調は穏(おだ)やかだが、決断力に欠けていることを指摘(してき)され、顔が下を向いた。

*せがなくていい、と祖父がポケットから小さな紙を出した。

「色はゆっくり考えればいい。だが、そろそろ買い物に行ってくれるか。来週なんてすぐだぞ。お父さんたちをもてなす準備を始めようじゃないか。」

(5) はい、と小声で答え、美緒はメモを受け取る。

ショールの色だけではない。東京へひとまず帰るか、この夏ずっと祖父の家で過ごすか。

それを父に言う決断もつけられずにいる。

祖父のコレクションルームから気になる画集や絵本を部屋に運んだあと、いつもはスープを入れているステンレスボトルに水を入れ、盛岡の町に出かけた。

（伊吹有喜「雲を紡ぐ」による）

〔注〕

祖母――美緒の母方の祖母。横浜に住んでいる。

ホームスパン――手紡ぎの毛糸で手織りした毛織物。

私のショール――美緒が生後間もない頃に父方の祖父母から贈(おく)られた、とても大切にしている赤い手織のショール。

雪童子(ゆきわらす)――子供の姿をしている雪の精。

コチニール染め――コチニールカイガラムシから採れる赤色の天然色素を用いた染色作業。

せがなくていい――急がなくてよい。

〔問1〕(1)「ねえ、おじいちゃん。あの棚の本、あとで私の部屋に持っていっていい？」とあるが、このときの美緒の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　幼い頃に感じられなかった、絵本の美しさや楽しさに気付かせてくれた祖父に親しみを抱き、祖父の本をもっと読みたいと思う気持ち。

イ　祖父が絵本に登場する服の色に着目していることに興味をもち、自分の本と棚の本を研究して、祖父に認めてもらいたいと思う気持ち。

ウ　祖父が親愛の情を示してくれたことを嬉しく感じ、自分が棚の本に興味を示すことによって、祖父をもっと喜ばせたいと思う気持ち。

エ　会話を通じて祖父の人柄(ひとがら)や考え方にひかれ、祖父が集めてきた棚の本を読むことで、本の好みや選び方を知りたいと思う気持ち。

〔問2〕(2)ノートをのぞくと角張った字と、流れるような書体の祖父の筆跡が混じっていた。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　祖父が曾祖父の厳格さに反発する気持ちをもっていたことを、二人の対照的な書体を対比させて描くことで、象徴的に表現している。

イ　祖父が曾祖父と共に芸術的表現を追求していたことを、二人の筆跡をたとえを用いて技巧的に描くことで、情緒的に表現している。

ウ　祖父が曾祖父と共に染めに携わりつつ記録を引き継いできたことを、二人の異なる筆跡を視覚的に描くことで、印象的に表現している。

エ　祖父が曾祖父と共に色鮮やかで美しい糸を紡ぐ仕事を続けてきたことを、二人の字形や色彩を絵画的に描くことで、写実的に表現している。

〔問3〕(3)即答したが、そのあとの言葉に祖父は詰まった。とあるが、「祖父」が「そのあとの言葉」に「詰まった」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　一度は否定したものの、当時を振り返って本当はがっかりしていたのだと思い直し、そのときの気持ちを美緒に伝えたいと思っていたから。

イ　息子が自立したときに抱いた切なさと、家業に対する息子の思いを推し量っていたことを振り返りつつ、美緒に伝える言葉を探していたから。

ウ　息子の進んだ道に理解を示しつつも、心の底に抱いてきた寂しさや疑問が不意に膨れ上がり、気持ちを懸命に抑えようとしていたから。

エ　気落ちしなかったと答えたのは、祖父としてただ威厳を示そうとしたためだったと気付き、美緒にどう説明すべきか迷っていたから。

〔問4〕(4)目の前にある大量のノートを美緒は見つめる。とあるが、この表現から読み取れる「美緒」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　脈々と続いている生命と家業の技術を尊く感じつつ、父が自分の名前に込めた家業の継承への期待を知って徐々に意欲を高めている様子。

イ　目の前にある大量のノートに記されたこれから関わろうとしている仕事の量と質の高さに戸惑い、自分の拙さを強く感じている様子。

ウ　曾祖父と祖父の染色への思いや労力に敬服するとともに、父が大切に思っていた家業を継がなかった真意を測りかねている様子。

エ　曾祖父と祖父の研究の重みや自分の名前に込められた父の思いを想起しつつ、ノートに従って糸を染めてみたいと考えている様子。

〔問5〕(5)はい、と小声で答え、美緒はメモを受け取る。とあるが、このときの「美緒」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア　染めに取り組むことが認められなかったことはもっともだと納得し、ショールの色を決められない自分の優柔不断さを嫌悪するが、父親たちにはまだ自分の能力の限界だとは思われたくないと願う気持ち。

イ　染めの希望がかなわず残念に思うものの、決断力の弱さを指摘されてもなお染めに対する意欲を失わず、父親たちとの再会に思いを巡らす中で自分のこれからのことをどのように伝えるべきか迷う気持ち。

ウ　染めに取り組みたいという願いがかなわなかったことに悲しみが込み上げ、急がなくてよいという祖父の慰めの言葉と、父が祖父を説得すれば染めに取り組めるかもしれないという期待にすがりたい気持ち。

エ　染めの仕事を認めようとしない祖父の態度に困惑しながら、決断力の弱さを自覚して落胆するとともに、父親たちとの再会を控えて染めとの向き合い方を模索してこなかったことを後悔する気持ち。

4 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

以前、興味深い話を聞きました。鉄筋コンクリート造の団地で生まれ育った小学生がはじめて田舎にある旧来の日本家屋に行ったときの話です。瓦屋根の下、縁側に寝そべり、庭や遠くの山並みを見ながら彼はこう言ったそうです。〝懐かしいね〟と。彼にとってみれば未知の新しい場所なのですが、すでに体験したことのある場所のように感じているかのようです。それはＤＮＡに刷りこまれた風景なのか、あるいは幼少期に見聞きした日本昔話の絵本の画がずっと頭にあったからなのかわかりませんが、いずれにせよ琴線に触れる、情感溢れた実体的な場所に出会うことで記憶の回路がつながったのではないでしょうか。（第一段）

ポルトガルに旅行したことがあります。はじめて行く国、はじめて行く場所だったのですが、そこで見た風景や人の営為はとても〝懐かしい〟と感じたのです。これも自分の中に潜在的にあった記憶の断片のようなものがつながったからでしょう。かつて自分の身の周りにあったけれどもいまは失われてしまった風景や人の営為がポルトガルにはまだある、という切ない喪失感もともなっていたように思いますが、しかしそれ以上にこの場所に出会えてよかったと思う喜びの感情がはるかに大きかったように記憶しています。そんな懐かしさの感情を抱くことができれば、その新しい場所は慣れ親しんだ馴染みのある場所になります。するとそこに安心感と寛容さを感じることができます。（第二段）

(1) そんな団地の小学生の話やポルトガルでの体験は、複合的で抽象的な懐かしさということで共通しています。場所や空間における〝新しさ〟と〝懐かしさ〟は隣り合わせであるということや、人の記憶の回路をつなぎ合わせることができる伝統、慣習が根付いた実体的な空間、場所の尊さと力強さを感じさせます。そしてまだ自分が訪れたことのない世界にも懐かしい場所は存在していて、それを発見できるということの喜びと可能性も感じさせてくれます。（第三段）

一方、何十年かぶりに故郷に帰って食べる料理や、顔を合わせる家族、親戚や友人、そしてあらためて眺める風景に、直接的で具体的な懐かしさを感じる場合も多いでしょう。しかし久しぶりに出会う懐かしいものは以前出会ったものとは、正確にいえば異なっています。物理的な経年変化があるからではありません。それは自分自身が時間や経験を積み重ね、大きく変化したということなのです。例えば、当時は母の味や郷土料理、故郷の風景が好きではなかったのに、その後の時間の中で経験してきたことを客観的に相対的に重ね合わせてゆくと、実はこんなにも美しく、美味しく、尊いものだったのだということに気づいた経験は誰にもあるのではないでしょうか。それは自分の感情や視点がいまと昔では大きく変化したことで、久しぶりに出会うものや人の〝質〟や〝価値〟さえも自身が変えたということなのだと思います。〝平凡〟を〝非凡〟に変えたといってもいいでしょう。そしてその進化した感情、視点によって、伝統や慣習の中にある、人、営為、原風景を〝誇り〟に思うことができるようになっているのです。(2) 懐かしいという感情によって人生の中で新たな価値を見出したのです。それは懐かしさという感情の素晴らしい働きです。さらにこの〝誇り〟という感情はとても重要です。なぜなら人は、誇りに感じるものは自然と大切にしようとするからです。（第四段）

人は記憶を頼りに生きてゆく動物と言われています。言い方を換えれば、懐かしさのような記憶に関わる情緒抜きでは人は生きてゆけないということです。懐かしさは、視覚だけでなく触覚、聴覚、嗅覚、味覚と

いった五感をともなった記憶が呼び起こされ、それと向き合うことでいまの自分の肉体、存在、歴史、居場所を肯定することができ、気持ちが未来にひらかれてゆく前向きで大切な感情と言われています。それが証拠に、人は負の感情を抱くものに出会ったときには決して懐かしいとは感じません。懐かしいものや人に出会ったときに、人は自然と笑みを浮かべていることが多いでしょう。懐かしさとは人の〝正〟の、そして〝生〟の感情なのです。（第五段）

しかし、どうも私たちは懐かしさに対して認識を誤ってしまうことが多いように思います。〝懐かしの昭和〟〝郷愁誘う町〟〝懐かしのおばあちゃんの味〟。それらの言葉からは〝昔はよかった〟という懐古的な眼差しか感じられず、前向きな姿勢や未来への可能性のようなものはあまり伝わってきません。過去は過去のものとして缶詰に閉じ込めたような、博物館のケースの中に入れた展示品のような扱いにされてしまっています。また町づくりや建築においても懐かしさや郷愁のイメージをわざと誘うようなものも見受けられます。それら固定的な〝懐古の商品化〟や〝郷愁のパッケージ化〟は、かえって人のイマジネーションを閉ざしてしまう危険をはらんでいます。（第六段）

さて私たちは戦後、〝変わること〟が豊かさと明るい未来を手に入れることだと信じてきました。もちろん変わらなければならないことも多々あったと思いますが、〝変えるべきこと〟と〝変えなくてもいいこと〟を整理せずに急進的に走り続けてきたように思います。急速な変化は自然風土やかけがえのない人の営為を壊し、人の記憶にとって大切な〝原風景〟を奪ってゆきました。懐かしいという前向きな感情を抱く間も許されていなかったかのようです。またいま、人が毎日ほとんどの時間見つめているものはスマホやコンピュータのモニターの奥に広がる膨大なデータの世界です。それらは人の情報処理能力をはるかに超えるスピードで膨張し、そして更新されてゆきます。(3)そんな中、私は世の中が更新し続けるもので埋め尽くされてゆけばゆくほど建築こそは動かずにじっとしていて、慣れ親しんだ変わらない価値を示すものでなければならないという思いを強くしてきたのです。言い換えれば、建築さえも急進的に更新し続けるだけの存在になってしまったら、人は何を記憶の拠り所にしてゆけばいいのかわからなくなってしまうのではないでしょうか。（第七段）

（堀部安嗣「住まいの基本を考える」による）

〔問1〕(1)そんな団地の小学生の話やポルトガルでの体験は、複合的で抽象的な懐かしさということで共通しています。とあるが、「複合的で抽象的な懐かしさ」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 未知の事象がもつ情感と潜在的な記憶がもつ情感が重なり合うことで思い出される、幼少期の記憶から生じる懐かしさのこと。

イ 未知の場所との出会いから生じる喜びと情感溢れる場所の記憶から生じる郷愁との比較を通して、心に浮かぶ懐かしさのこと。

ウ 未知の風景を前にして感じる、かつて住んでいた町の失われた景色に対して抱いた喪失感から生じる懐かしさのこと。

エ 未知のものと出会うことによって、潜在的に存在する様々な記憶の断片がつなぎ合わされて湧き上がる懐かしさのこと。

〔問2〕(2) 懐かしいという感情によって人生の中で新たな価値を見出したのです。とあるが、「人生の中で新たな価値を見出した」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 経験を積み以前とは異なる視点をもつことで、久しぶりに出会ったものにこれまで気付かなかった魅力を感じるようになったということ。

イ 自分の経験から得たものの見方で目の前の事象を見直すことによって、伝統や慣習にとらわれない新たな価値を見付けたということ。

ウ 前向きで大切な感情を伴う過去の記憶に導かれるように、周囲にあるものにかつて抱いていた誇りがよみがえってきたということ。

エ 久しく出会うことができなかったものに対して、時間が経過してもそこに見出していた魅力を改めて感じることができたということ。

〔問3〕 この文章の構成における第六段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた懐かしさに関する説明について、筆者の認識の根拠となる事例を挙げることで、自説の妥当性を強調している。

イ それまでに述べてきた懐かしさに関する説明に基づいて、筆者が述べた内容を要約し論点を整理することで、論の展開を図っている。

ウ それまでに述べてきた懐かしさに関する説明を受けて、筆者の認識とは異なる具体例を示すことで、文章全体の結論につないでいる。

エ それまでに述べてきた懐かしさに関する説明に対して、筆者の主張と対照的な事例を列挙することで、一つ一つ詳しく分析している。

〔問4〕(3) そんな中、私は世の中が更新し続けるもので埋め尽くされてゆけばゆくほど建築こそは動かずにじっとしていて、慣れ親しんだ変わらない価値を示すものでなければならないという思いを強くしてきたのです。と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 未来への前向きな意志をもつことが難しい世の中ではあるが、建築だけは、懐かしさや郷愁を印象付けることが必要であると考えるから。

イ 急速に物事が更新され続ける現在において、変わらずそこにあり続ける建築は、人の記憶の原風景となり得る存在であると考えるから。

ウ 建築においても、〝変えるべきこと〟と〝変えなくてもいいこと〟を整理し、新たな建造物には懐古的な工夫が必要であると考えるから。

エ 明るい未来を築くためには変化を止めることが重要であり、不変の象徴として建築を位置付け、人々の意識を向けさせたいと考えるから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「自分の『記憶の拠り所』となるもの」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

5

次の**A**は、鴨長明が書いた「*方丈記」に関する対談の一部であり、**B**は、対談中にでてくる「*無名抄」の俊恵から長明へのアドバイスに当たる原文の一部である。また、あとの［　　］内の文章は**B**の現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔**注**〕がある。）

A

駒井　素朴な疑問ですが、今の出版の世界だと、編集者がいて「これを書いてくれませんか」という話になりますよね。『方丈記』を書いているときの長明には、誰かに読ませるとか、後世に残すとか、そういう思いはあったのでしょうか。

蜂飼　どうなんでしょう、わかりませんね。誰かに読んでもらう、あるいは読まれてしまう可能性は考えたのかなと思いますが、結局は、ゆかりのあるお寺の僧侶たちに渡ったんじゃないかと思うんですよね。でも、現代的な意味で言う読者ってものを考えたかというと……。当時は手書きで、最初は一冊しかない。それを読んでもらいたいとか、読まれてもいいと考えたのか、その辺りは研究などを見ても、推測の域を出るものがありません。

これがたとえば『源氏物語』だったら、みんなで読んで聞いて楽しむという、そういう舞台を想像できるじゃないですか。それに対して『方丈記』のような作品は、どういう享受のされ方をイメージしたか、想像するのが意外と難しい。(1)

駒井　宮廷文化の中で筆写されたりして読まれるものであれば別ですが、この作品は、方丈の中で書かれたものが残って、こうやって生きている。古典の中でも、一味違う力を強く感じます。

蜂飼　後の『平家物語』にも影響があるわけですしね。そうなると、やはり、伝わる力を当時から持っている作品だったんだと思います。

ただ、受け取った人が、どういう部分に対してどういう感じ方をしたかということは、現代人には想像が難しいかもしれません。『方丈記』の最後の部分に、自分は修行で山の中に籠っているのに、こんなことを書き連ねていてはいけないと自戒する箇所があります。だから、そういうことを含め、修行に入った人の手記みたいなものとして当時の受け手は受け取ったんだろうなとは思うんです。

それに対して、現代に読むときに、読者がどのような要素を通して『方丈記』を受け取るかと考えると、自分自身では運がないと思っている人の個人的な来歴や気持ち、それに自然描写の美しさ、そして災害の記述が持つある種の臨場感、そういった要素で受け取るわけですよね。(2)ですから、まあ、さまざまな受け取り方に対して開かれている作品と言っていいのかなと思いますよね。たった二十数枚の短めの作品であるにもかかわらず、いろんな近づき方ができると。

駒井　彼の生涯を遡ると、方丈に住む前は、*禰宜の地位に就きたいとか、ひょっとしたら歌のお師匠にだとか、ずいぶん俗っぽい夢を持っていたようですね。最初から人生を捨てて*解脱していたとか、そういう人ではなかったということですよね。

蜂飼　そうですよね。とくに、自分の亡くなった父親に関わる*下鴨の禰宜の職には、相当こだわったようです。それが実現できないということは、大きかったのかなと思います。

駒井　ある種の挫折感のようなものがあったのでしょうか。

蜂飼　ええ。挫折ですけど、自分では、運がないという言い方をして

います。原文の言葉だと「*おのづから短き運を悟りぬ」。ただ、この人は自分自身で運が悪いと言っていますが、外面的に考えれば、人間関係ではわりといい人たちに恵まれた部分があったと思う。

駒井　恵まれていますよね。

蜂飼　たとえば、長明の歌の先生は俊恵という歌人です。(3)俊恵から与えられたアドバイスについては、長明が書いた歌論書の『無名抄』にいろいろ出てきますが、俊恵のもとにいたときの思い出話なども記されていて面白いですし、長明自身に魅力があったからこそ身のまわりにそういう関係ができたんじゃないかと思います。

彼は、琵琶が上手な音楽家でもありました。琵琶の先生は*中原有安という人ですけど、この人も長明に目をかけている。そんなところに注目すると、本人は不遇だったと言うけれども、ただそればかりではなかっただろうと思うのです。

駒井　本人がそう思っても、歌の先生が優れた人だったり、琵琶の師匠がよくしてくれたり、客観的に見ると結構、恵まれた人間関係の中を生きた人じゃないですか。

蜂飼　そうです。あと、後鳥羽院。後鳥羽院も長明にはかなり目をかけていた。彼が『新古今和歌集』を企画して、そのために設置した和歌所という機関があります。そこで働くメンバーの一人に選ばれているんです。他のメンバーはみんな貴族で、長明は地下の人（昇殿を許されていない官人や身分の人）なんですけども、大抜擢されてそこに入って仕事をしている。

そうなると、歌に命を懸けている人ですから、一生懸命仕事をしたらしい。私たち現代人は、長明をまず『方丈記』の作者だと思いますけど、彼はまず歌人なんですよ。それで、和歌所の事務方の長にあたる仕事をしていた源家長という人が書いた『家長日記』の中に、長明の精勤ぶりは素晴らしいとある。(4)そういうところに、長明の物事にかける情熱というか、人間臭さが表れているなあと思うんです。

（蜂飼耳、駒井稔「鴨長明『方丈記』」〈「文学こそ最高の教養である」所収〉による）

B

歌は極めたる故実の侍るなり。われをまことに師と頼まれば、このこと違へらるな。そこはかならず末の世の歌仙にていますかるべき上に、かやうに契りをなさるれば申し侍るなり。あなかしこあなかしこ、われ人に許さるるほどになりたりとも、証得して、われは気色したる歌詠み給ふな。ゆめゆめあるまじきことなり。後徳大寺の大臣は左右なき手だりにていませしかど、その故実なくて、今は詠みくち後手になり給へり。そのかみ前の大納言など聞こえし時、道を執し、人を恥ぢて、磨き立てたりし時のままならば、今は肩並ぶ人少なからまし。われ至りにたりとて、この頃詠まるる歌は、少しも思ひ入れず、やや心づきなき言葉うち混ぜたれば、何によりてかは秀歌も出で来む。秀逸なければまた人用ゐず。歌は当座にこそ、人がらによりて良くも悪しくも聞こゆれど、後朝に今一度静かに見たるたびは、さはいへども、風情もこもり、姿もすなほなる歌こそ見とほしは侍れ。

歌にはこの上ない昔からの心得があるのです。私を本当に師と信頼なさるのならば、このことを守っていただきたい。あなたは(5)かならずやこの先の世の中で歌の名人でいらっしゃるに違いない上に、このように師弟の約束をされたので申すのです。決して決して、自分が他人に認められるようになったとしても、得意になって、われこそはという様子をした歌をお詠みなさいますな。決して決してしてはならないことである。*後徳大寺左大臣藤原実定公は並ぶもののない名手でいらっしゃったが、その心得がなくて、今では詠みぶりが劣ってこられた。以前、前大納言などと申し上げた時、歌の道に執着し、他人の目を気にし、切磋琢磨された時のままであったならば、今では肩を並べる人も少ないであろう。自分は名人の境地に到達したのだと思って、近頃お詠みになる歌は、少しも深く心を込めず、ややもすれば感心しない言葉を混ぜているから、どうして秀歌も出来ることがあろうか。秀作がなければ二度と他人は相手にしない。歌は詠んだその場でこそ、詠み手の人となりによって良くも悪くも聞こえるが、翌朝にもう一度静かに見た場合には、そうは言っても、情趣も内にこめられ、歌の姿もすなおな歌こそいつまでも見ていられるものです。

（久保田淳「無名抄」による）

〔注〕

方丈記――鎌倉時代に鴨長明が書いた随筆。京都郊外にある方丈（畳四畳半ほどの広さ）の部屋に住みながら書いたことから名付けられた。

無名抄――鎌倉時代に鴨長明が書いた歌論書。

禰宜――神社における職名の一つ。

解脱――悩みや迷いから抜け出て、自由の境地に達すること。

下鴨――京都にある下鴨神社のこと。

おのづから短き運を悟りぬ――自分には運がないということを自然に知った。

中原有安――平安時代末期の歌人、音楽家。

後徳大寺左大臣藤原実定――平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての歌人。

〔問1〕(1)駒井さんの発言のこの対談における役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　直前の蜂飼さんの発言に賛同しつつ、「方丈記」の魅力を語ることで、話題を「源氏物語」から「方丈記」に戻そうとしている。

イ　「源氏物語」と「方丈記」に関する蜂飼さんの発言を受け、二つの作品の共通点を述べて、「平家物語」の話題へと広げている。

ウ　自らの疑問に対する蜂飼さんの見解を受け、作品の受け入れられ方に関する「方丈記」の評価を述べて、次の発言を促している。

エ　二つの作品を対比する蜂飼さんの発言を受け、「方丈記」に絞って感想を述べることで、話題を焦点化するきっかけとしている。

〔問2〕(2) ですから、まあ、さまざまな受け取り方に対して開かれている作品と言っていいのかなと思いますよね。とあるが、「さまざまな受け取り方に対して開かれている作品」について説明したものとして、最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 書かれている話題が多様なことから、何を主要な要素と受け取るかは、現代における読者に広く委ねられている作品。

イ 過去の読者よりも、現代の読者の心を揺(ゆ)さぶるような内容が複数書かれていて、現代の読者でも理解しやすい作品。

ウ 古典の中でも短いとされてはいるものの、書かれた当時の読者が読めば、多様な受け取り方ができたと思われる作品。

エ 修行中に、他のことに没頭する自分を戒めようとして書かれているため、現代人が修行する際にも大いに参考になる作品。

〔問3〕(3) 俊恵から与えられたアドバイスについては、長明が書いた歌論書の『無名抄』にいろいろ出てきますが、とあるが、Bの原文において、「俊恵」が良いと思う歌はどのようなものだと書かれているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 証得して、われは気色したる歌詠み給ふな

イ われ至りにたりとて、この頃詠まるる歌

ウ 何によりてかは秀歌も出で来む

エ 風情もこもり、姿もすなほなる歌

〔問4〕(4) そういうところに、長明の物事にかける情熱というか、人間臭(にんげんくさ)さが表れているなあと思うんです。とあるが、「そういうところに、長明の物事にかける情熱というか、人間臭さが表れている」について説明したものとして、最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 歌の才能を認められていたにもかかわらず、「方丈記」の価値が認められなかったところに、不運な長明らしさが出ているということ。

イ 歌に精進(しょうじん)していたのに、歌人ではなく「方丈記」の作者だと世間で思われていたところに、宿命的な長明の人生が表れているということ。

ウ 不運だと言いながら、恵まれた人間関係の中で歌や音楽の才能が認められ意欲的に取り組む姿に、長明の魅力がにじみ出ているということ。

エ 望む職業に就けず、自分の才能が開花しないのは運がないだけだと思う姿勢に、長明の前向きで動じない人柄(ひとがら)が示されているということ。

〔問5〕(5) かならずやとあるが、この言葉が直接かかるのは、次のうちのどれか。

ア 名人で

イ いらっしゃるに

ウ 違いない

エ 申すのです

＊　適切に一つの選択肢を導くことができないため、5 の〔問5〕について全員に一律5点を与える。